



図1 深山医院のスケッチ

ここに記した上増呉服店は大きな店であった。深江第一の商店であり繁盛していた。通りに暖簾が下っており、これをくぐり、入る

に質屋があった。道の北側には大きな店舗、上増呉服店があり、更に東に油屋、散髪屋と続く。それ等の店舗と交り合って住居が並んでいた。岡田の家もこの道に沿ってあったが南北の通りの道角にあり、この通りにあった門から出入した。

五、旧道の商店街（深江の商店街）
新道^{しんみち}に対する旧道^{きゅうみち}は深江の本通りであった。駅からこの本通りに入り東に向かって進むと、深山医院、阪口医院、豆腐屋があり、道の対面に八百屋の岡富さんがあった。更に進むと荒物

深江の心象風景（2）

深江の町並みと岡田家

筆者 岡田 茂 義

と広い畳敷きの大広間が開ける。色々の呉服物が種類を分けて各所に積み重ねてある。思う品物の所に行って、丹物^{たんもの}を広げてもらってそれを見る。時々、この店から男女の東西屋（宣伝屋）が出て来る。男は皿鐘の付いた大きな太鼓を胸に当て、両手で撥^{はち}を打ち、太鼓と鐘を鳴らしながら最初に「東西、東西」から始めて大きな声で上増屋の宣伝広告をしながら行進する。女は美濃笠をかぶり、手甲^{てこう}、脚絆^{きくはん}の姿で三味線を太鼓に合わせながら後に従う。チン、ドン、シャンと鳴らすので「ちんどん屋」とも云った。

前記の南北の通りを辿れば旧道より南へ進むと、先づ八百屋が出て来る。今では珍しい「棒だら」が藁縄で吊してある。鱈

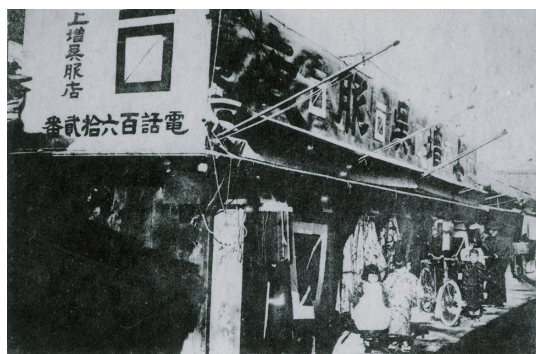


写真1 上増呉服店の外観



写真2 上増呉服店の店内

（部二共）場列陳店服呉増上 江深 灘

の干物であるが偶々食卓に出ると不味いなと思った。

次に新道を越すと岩田屋の酒屋があった。立派な建物の酒屋で裕福な家であるので悠々と商売をしていた。店にはいると大きな酒樽が目につく。客があれば栓をゆるめて直接枡に入れ客に出す。客は枡の隅から飲む。枡の枠に塩が載せてあるので塩を肴にこれを砥めながら飲んだ。

その頃、芦屋はまだ開けていなかった。殊に西打出などは、毎日岩田屋へ酒を買いにきた。子供たちをそのお使い役として集団で遣わした。五、六人の子供たちが毎日やって来る。我々子供達はそれを待ちかまえた様に見守っている。時にはお互いに集団闘争ともなった。そんな事があるので相手は一人だけ年上の頑丈な子供が付いていた。

その南隣りに料理屋があった。石松と云ったと思うが判然としない。なかなか上手に料理をしてくれて、時々のご馳走にお造りを頼んだり鮎を頼んだりした。これより更に浜の方に進むと八百屋があった。息子がいて、昭和の初期私と徴兵検査を同じくした彼は甲種合格だったが、私は第二乙種合格と怒鳴られて帰って来た。当時宇垣大将の軍縮の時代であり大部分は丙種であった。とは云うものの開戦となると乙丙の差別もなく、多少の時期の差はあっても甲種同様に殆ど全部徴兵された。

私の場合は戦争の最末期、神戸の空襲により軍の徴兵台本が焼失した。後は市町村に対して何名の壮丁を出すべしとの令書が役場に来た。当時父は深江の属する本庄村の村長をしていた。役場で壮丁を選出して軍に提出した。私は幸いにしてその選を免れた。

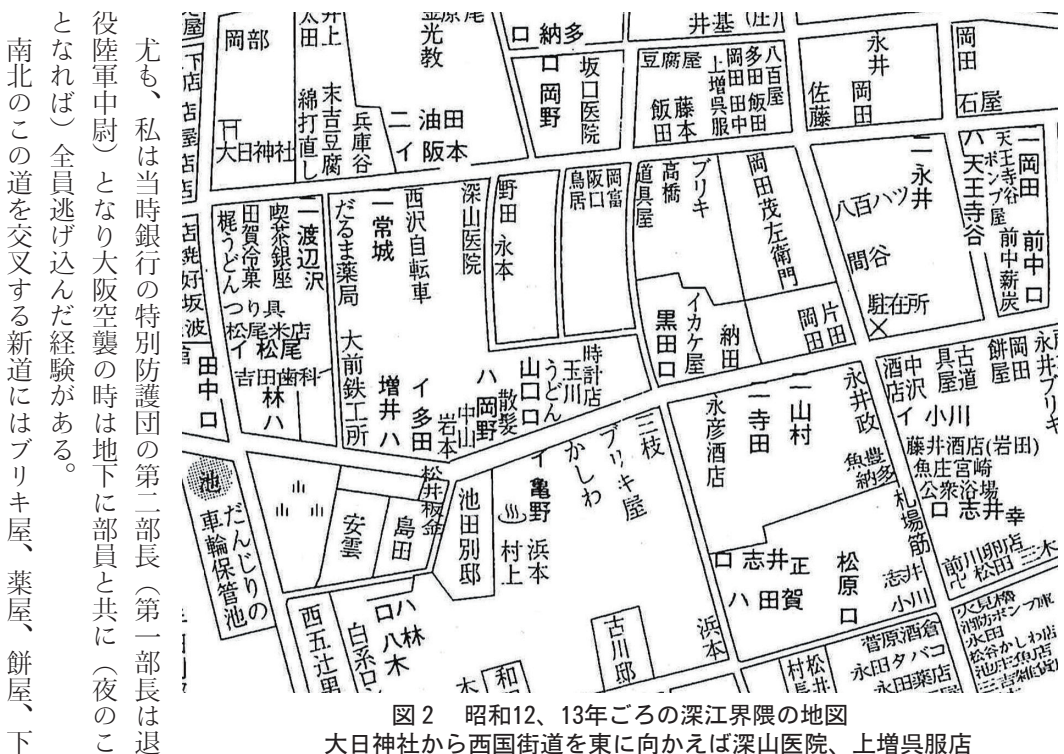


図2 昭和12、13年ごろの深江界隈の地図
大日神社から西国街道を東に向かえば深山医院、上増呉服店

岡田氏邸宅平面図

縮尺 100 分 1 尺

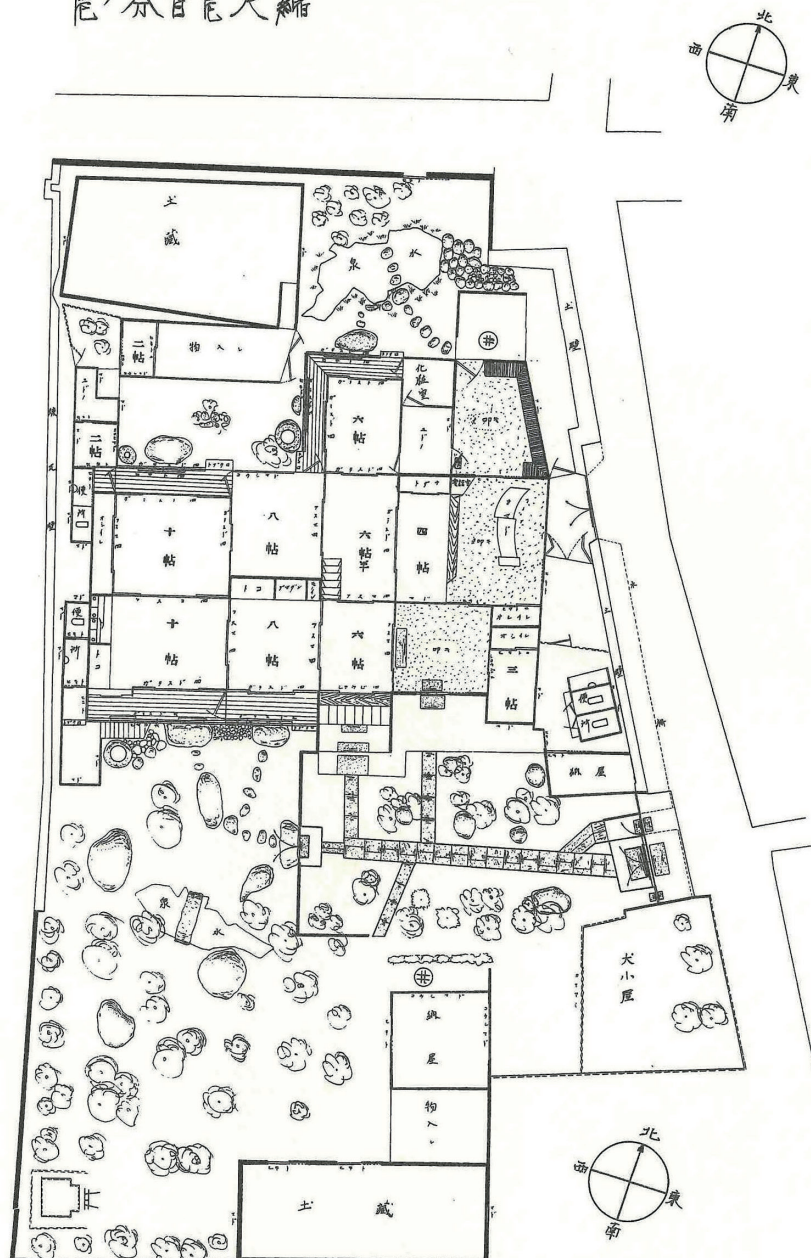


図3 岡田茂左衛門の新宅平面図

岡田茂左衛門は、江戸時代以来の網屋茂左衛門邸宅を岡田善蔵に譲り、北側に新宅を建てたが、昭和20年の空襲で焼失した。岡田善蔵に譲られた網屋茂左衛門旧宅は、国道43号線の工事に伴いこの地に曳家工法で移転されたが、阪神・淡路大震災で全壊した

駄屋などがあった。その中心部に警官の駐在所があった。家族で定住していた。

註 ブリキは鍍力と書いた様に記憶する。今住んでいる東京には広しと雖もこのブリキ屋の表示を見ることはなかったが、最近漸く「ブリキ店」の看板を見付けたが、横にステンレス加工と添示して

あった。ステンレス加工の表示があつて初めてこの店舗の仕事が分る。場所は目黒区東山蛇崩の三方交差点の所にある。蛇崩とは、目黒川が氾濫して堤に敷設してある蛇腹が度々崩れることからの由来だろう。ブリキは今では生産されてはいないだろう。薄いメッキが直ぐ剥げて下地の薄鉄板が赤く錆びる。昔はよくこの錆び付いた屋根を見かけたものだ。また、ブリキは厳格に云えば錫メッ

キの鉄板である。ブリキ屋は初めは、このブリキを使っていてブリキ屋と云ったが、次第に亜鉛メッキに変わって行った。その方が安くて永持ちするからである。この亜鉛メッキのものをトタンと云う。ブリキ屋がこのトタン鉄板を使ってトタン葺きの屋根を作った。然し、この作業の者をトタン屋と云わず、相変わらずブリキ屋と呼んだ。ブリキの語源はオランダ語の *Blik* によるものである。

六、深江の管領地

元来深江の土地は管領地であった。普通は城主があつて土地はそれに所属するものであるが、ここは徳川幕府直轄の地で所謂「天領」であり、幕府無き後、政府の管領地となった。従つて、住居の集合地を境として、その東側より芦屋川までの広域地帯は個人所有が無く、地租（固定資産税）が全く上らず政府として已むを得ずこれを個人割当てにした。当時我が家は代々村長をしておつたので割当も厳しく、新規割当の土地からは収入皆無の事として、従来の所から上る収入では到底賄えず、遂に居を神戸の加納町に移した事がある。どの様な経過があつたか知らないが、また元の深江に戻り割当地に綿の木などを植えた。割当地は何れも水利もきかず荒涼たる荒地ばかりだった。

時代が少し移り、正蔵の時にこの割当地の芦屋川寄りの砂地に黒松の苗木を植えた。この所は元々水田であつたのだが、年々の芦屋川の氾濫によって砂で埋められ、全く利用出来ない状態であつた。そこで黒松は早く成長するとしてこの苗木を植えたが全くその通り。戦争当時、神楽町と呼んだがここに住居を建てた時（昭和十四年）、既に太い幹になっていた黒松が敷地の中

に五十三本もあり毎年冬に藁で松の幹を巻いてその中に害虫が冬眠するため籠るのを春に焼き捨てる。そのために五十三枚の藁巻を作った。住居の敷地の外に、その一区画三千坪の所にはこの黒松が生い茂り、戦時中、川西航空機の未完成戦闘機の隠し場所として利用された。穴を大きく掘り機体を埋めようとするが思うに任せず、一部、外部に現われていて機体のジュラルミンが月光を受けてキラキラと反射して、これでは敵機の目を逸らし得ないと思つた。

七、岡田家の家業

岡田家の家業は網屋茂左エ門と云う様に綱引き（漁夫）の元締めであつたが、元来浄土真宗西本願寺の門徒であり、殺生禁断の法則に従い漁業を廃めて酒造りに移った。祖母いくが三田、日西原の出であつたので、三田米を運んで醸造し「正蔵」の銘を付けたが、なかなか技術が必要で、殊に麴と精米を大桶に仕込んで寝かすことが、当時は非常に難しい作業だった様に思う。今は簡単に桶の温度を調製出来るが、当時は暖冬ともなると、酒になるべき麴と米が一晩で酢になって終ったそうだ。高価な



写真3 岡田茂義氏邸の南側の庭

米を沢山使用しているので、一晩で身上^{しんしよ}限り（破産）となったと聞かされた。

そこで、こんな危険な仕事より大桶があることなれば、醬油を作ろうと云うことになった。

蔵の内には大きな桶が並べられ、上の天井には長い梁^{はり}が渡されている。その梁を伝わって鼠が走っている。時には下の大桶に落ち込むことがある。梯子を掛けて上り大桶の中を時々見るが、鼠が死んで浮かんでいることがある。驚いてこの事を伝えると、これで醬油に味が付くのだとの答えが返ってきた。この事を、随分後の事とはなるが既に亡くなられたキッコーマンの社長、茂木左平治さんに聞いたことがある。笑って答えず。銘醸造キッコーマンにもこの様な事が度々あるのだろう。

八、深江駅前の思い出

阪神電鉄、大阪軌道鉄道（大軌、今の近鉄）、南海鉄道は早くから開通していた。何れも明治年間、或いは、大正初期の創業であろう。祖母に伴われて大阪に行くとき、淀川の長い鉄橋を渡る。祖母に抱き上げられて前方を見れば、鉄橋の梁の連続が恰もトンネルの形を見せ、長い長いトンネルを通っている様な感じを味わった。

早くより開通している阪神電車の深江駅の南側に、小さな百二十坪程の土地がある。先祖代々受け継いだ土地であり、売る訳にいかず、唯今、そこに駅前^{（平成十年）}にふさわしい商店を容れる三階建の貸しビルを建設中であり、本年中に完成の予定。

この所を昔、貸家として利用しており岡本瀧三郎さんに貸していた。阪神電車に勤めていた。立派な風格の人で、その母も

亦、大柄な風貌豊かな土佐の人であった。それにふさわしい話も聞かされた。自分で子を放る。屁^へを放ると云う様に産婆の手を借りずに自分一人で子を産む。この男勝りの豪放な性格は土佐人の気迫であろう。

瀧三郎さんは音声がかかった。而もよく響く声だった。当時流行した浪花節が得意でよく家に来て謳^{うた}ってくれた。浪花節だから語ると云うべきか。その大家の吉田奈良丸が住吉に住んでいた時代の事であり、その指導を受けていたのかもしれない。語り出すと浪花節だから一曲に長時間かかる。幼い私など直ぐ母の膝に眠ってしまった。

この瀧三郎さんの娘が昨年^{（平成九年）}亡くなった葦原邦子であり、この貸家で生まれ、ここで育ち、宝塚歌劇へもここから通った。暫く経つと、この貸家も古くなったので新しく旧道に面した所に貸家を建てたのでこれに移り住んだが矢張りここから宝塚に通った。葦原邦子は尼崎女学校を卒業したが非常な優等生であった



写真4 昭和5年の深江駅

由。その後、宝塚へ通うのも尼崎からの福知山線を利用したのである。まだ阪急神戸線が通じてなかった時代である。

深江駅前には、お餅屋さんの娘、音羽のふ子が育っている。

平成九年八月十三日、テレビ放送、「徹子の部屋」で、淡島千

景との対談、「葦原邦子さん追悼―平成九年三月十三日亡―」があり、我々が高商時代（昭和の初期）に憧れた葦原邦子の宝塚歌劇も初期の時代の写真が放映されたので懐かしく思んだ。葦原邦子と黒柳徹子の対談（昭和五十四年八月）も再放送された。

さて、この貸家の裏に大きな池があり、蓮が植わっていた。毎年八月十五日、お盆の頃、大きな華やかな赤い花が咲く。父がこれを盥船に乗って切り集めて来る。父は豊中の近くの桑津村で育った。今でも箕面を経て京都への西国街道（国道一七一号線）沿いに、大きな姿を見ることが出来る「昆陽の池」の近くである。従って、幼児の頃より盥舟に乗って池底の蓮根を掘り採った。盥舟と云

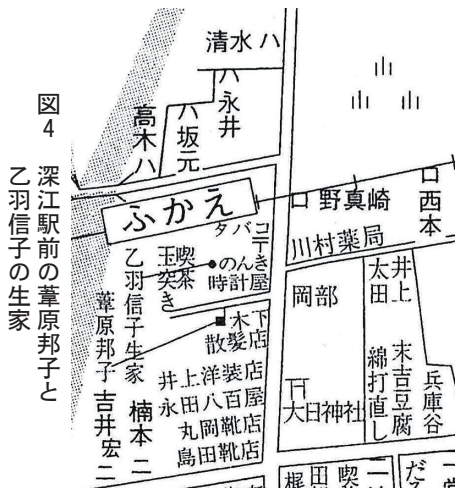


図4 深江駅前の葦原邦子と乙羽信子の生家

り採った。盥舟と云えば、洗濯用の普通のたらいより多少大きく深い。然し、これに乗り込んで浮かんで行くことは非常に難しい作業だ。しかも深江の池の場合には普通の盥を使ったので苦労した事と思う。

こうして切り集めた蓮の花を菰で包んで駅まで運び、電車で三宮、それより花の市場へと運び込む。

池から上る時、瀧三郎さんが漸く起きて来て歯刷牙子で一生懸命歯を磨いている。見られると恥かしいのでその目を避けてこつそりと逃げて行く。

質素な生活をして小銭を儲けると云うのが岡田家の仕来り（家憲）だったのだろう。

尚、父は正市と云い林家の四男として明治五年に生まれた。林家は当時広大な農地を所有していたが後年伊丹空港設置のため買収された。岡田家へ入婿となり、母ゑいと結婚した。昭和九年に正蔵より家督相続し、九代茂左エ門を襲名した。



写真5-2 乙羽信子



写真5-1 皇太子生誕を祝う深江の人々

九、高橋川の堤を歩いて野辺の送り

昔の葬式は、焼き場（火葬場）が今の墓地の一劃にあったのでそこまで野辺の送りをするのである。お棺を納めた輿を担いで、淋しい高橋川の堤の道を静かに進むのである。灘の天井川と云って、川はすべて地面より高い所を流れている。六甲山は花崗岩で出来ているので、もろく壊れて砂となり、川はこの砂で埋まり、流れを防ぐ堤防は次第に高くなり、流域の田畑より一段高い所を水が流れるので灘の天井川と云う。

当時とすれば、極めて長寿であった曾祖母（ひいばあさん）おたきさんが八十二才で亡くなり、小学校一年生の頃と思うが黒い詰め襟、半ズボンの洋服、黒い編み上げ靴を履いて、形見の品である、愛用していた杖を奉持して柩に添って野辺の送りをした。このおたきさんは最後まで割合健康的で、家の中を歩くとき、「ホイ、ホイ、ホイ。」と云いながら座敷を横切って自分の部屋に行った。然し、時には漏らしながらそれと知らずに。

おたきさんは神戸生田の素封家増田甚五郎家の松造を養子として入れて、茂左エ門を襲名させることにした。この増田家は



写真6 昔の高橋川河口

写真7 昭和5年の高橋川

これも資産家の北風家と親戚関係にあり、更に北風家は生島家の分家であり、本家の生島五郎左エ門と云えば当時神戸第一位の素封家である。その子孫である生島五治君が三和銀行に勤め秘書役などをやった。ある機会に彼に、あなたのお名前五治の五の字の意味を知っている者は、三和では私一人だろうと云った。彼も感激していた。尚、詳しい家系については過去帳参照のこと。

野辺の送りが済めばい

よいよ火葬である。火葬場には赤い煉瓦を積み上げた四角い煙突があった。納棺したら、炉の扉口から藁束を指し込み燃やした。読経が終りこれで野辺の送りが済んだのである。遺骨拾いはその翌日。燃料は薪であり、現在の様に火力は無く、即刻収骨は出来ない。然し、骨は完全に収納することが出来た。喉仏を一番に捜した。最近二、三の火葬に参列したが、何れも肝心の喉仏を拾い出せなかった。

火力が強いので、骨が壊れてしまう。仏壇に持ち帰って供養



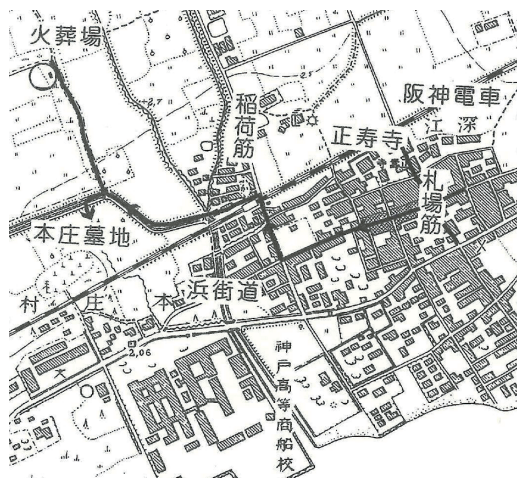


図5 本庄墓地と旧火葬場

すべきしるしが、無くなってしまうのである。

十、当時の帰依の據点、正寿寺

平成九年三月二十二日、深江正寿寺に寄贈した親鸞聖人鑄造物の除幕式があった。午後一時、志井さんに講の首脳として指導していただいた。三十名集まる。家内と二人で白い幕を引き落とした。読経焼香の後、次の様に挨拶をした。この献像は震災供養と見るべきだが、更に意義深く、親鸞聖人に帰依して門徒として教えを受け、人生を導いてもらうためだと説いた。丁度今は彼岸（二十日が春分）の頃である。八十数年前の幼い頃、春秋の彼岸には必ず祖母に手を引かれてお寺詣りをした。大きな本堂に座って上を見ると、幅の広い欄間に大きな瓶が割られて噴き出る水の流れに乗って、子供が飛び出している。司馬温

公^註の智仁勇の造形である。子供が瓶の中に落ちた、咄嵯に瓶を割る考えが頭に浮かぶ（智）。友達が瓶に落ちた。何としても助けたい（仁）。大きな石で、大きな瓶に挑み、これを破る（勇）。この智仁勇を見上げながらお説教を聞いた。

た。

この本堂は戦災で焼け落ちた。茂左エ門が妻ゑいの供養のため奉納したお堂のふすま絵も、戦災で焼けてしまった。

註 諸橋轍次『中国古典名言事典』。司馬温公、本名司馬光。北宋の名臣。王安石の新法に反対する。大師温公を贈られた。

幼い子供が院主さんのお説教を聞いても分かる筈がない。祖母の膝で眠ってしまう。大人の人達もこくりこくりと眠っている。そこで院主さんは説教を止めて落語に移る。万才かも知れない。

「お前どこから来たの？ 住所を云いなさい。」

「大阪ド、トンブリ川のコ、ニャクヤのシャ、クヤ、」

「何、はっきりと言いなさい」

再び、

「大阪ド、トンブリ川のコ、ニャクヤのシャ、クヤ、」

「分からない事を云うのやなあ。大阪道、道頓堀川の蒟蒻屋の借家か。やっと分かった。」

これで皆の衆、どっと笑って目が覚めた。

再び説教が始まる。説教が終って一人の老人が質問した。

「院主さん、ほんまに地獄極楽ありますのか？」

その答えは、

「ほんまにあるのかどうか儂も見たことがない。然し、若しほんまにあったらどうする。それだから今から説教を聞いて善行を積みねばならぬ。」

（続く）